



# ピッポ新聞

2012

9

No.264

## 子どもの本専門店 **ピッポ**

URL <http://www.pippo.co.jp>  
E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

## ピッポ古書クラブ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3  
TEL & FAX 054-345-5460

スイスへ行ってきたよ！  
(その2)  
首都ベルンへの旅

実は20年前ドイツへ来たとき、チューリッヒに2日ほど滞在したことがあったのだが、今の当たりにしているチューリッヒ・ハフト・バーンホフ（中央駅）の喧騒と賑わいは、記憶のかたずみに残っているものだが、イメージは少し違っていた。東京駅のようにごちゃごちゃしていればまだしも、だだっ広い感じで、しまりが無いというか、よくいえばスケールが大きい風景である。どこに焦点を当ててよいのか戸惑うばかりである。喧騒の中に身を投じその中の人となることで、チューリッヒに来たことをしみじみと思った。

今は午後7時すぎ。はやく予約してあるホテル「レオネット」を探さなければならぬが、どの出口から出ればよいのか見当もつかない。とにかく駅の建物から外に出てみると、タクシー乗り場があった。これに乗ってホテルまで行くことを思いついて、運転手に窓越しにホテルの住所を示し、ここまで行ってくれといったつもりだが、運転手には通じなかつたらしい。向こうに見える橋を示して、あの橋を渡って2つ目を左に曲がって行けばよいというのだ。

ほくも日本で調べて、ホテルまでは駅から歩いて5〜6分ほどと踏んでいたので、運転手はあ

まりにも近い距離だから歩いて行けと言いたのだと解釈し、歩くことにした。（実際はまっすぐ歩いて15分ほどかかった。）

橋の下には水量豊富なリマト川の水がとうとうと流れていた。橋をこえて、教えられた道筋をたどったが、行けどもいけども目指すホテルがみつからない。どこかで道筋を間違えたのかと思つて、ホテルのバウチャー（予約クーポン）を示し、通行人に聞いた。その教えるところに従つてさらに歩くと、ホテルは見つからない。だんだん心細くなつてきた。また歩いてる人に聞く、（尋ねる人みんな親切に教えてくれる。）その教えに従つて探すが、ホテルは見つからない。たぶん多くの語学力（聞く力）が災いしているのだと思う。



チューリッヒ中央駅の正面入り口  
左の銅像はチューリッヒ中興の祖

ところで、これまで尋ねた人は住所を示すと、必ず「わからない」とは言わずに、説明してくれるのだが、本当にホテルの場所がわかつているだろうか？

仕方なく、一度駅に戻ろうと考えたが、あちらこちらを曲がつたりしたため、今度は駅へ戻る道がわからなく

なってしまった。一つ安心なのは午後8時  
ちかいのに、昼間と変わらず太陽がまだ空  
にあり明るいことだった。チューリッヒは  
坂の多い街で、さつきから、スーツケース  
をガラガラひきずりながら坂道を登ったり  
おりたりしていたので、すっかり汗をか  
いてしまった。

今度は、自動車を歩道の脇に止めている  
人に聞いた。この人はトルコ系(?)の人  
のようだったが、ぼくのインチキ英語が理  
解できないようだ。ぼくも彼の言葉が理解  
できない。よく聞いていたら、どうやらド  
イツ語をしゃべっている。困った顔をした  
ら、彼は親切に歩行者を呼びとめて、受け  
渡してくれた。

今度の人は学生のような。ここはチュ  
リッヒ大学に近いのだった。学生はほと  
と示す住所を見て、いったんは説明しよう  
としたが、ホテルは近くであるが、道が少  
し入り組んでいるようだった。そこでホテル  
まで一緒に行ってくれるという。

トルコ系の人にお礼をいって、学生に従  
った。途中かなりの上り坂があったが、学  
生は多くのスーツケースを押ししてくれる。  
その坂道を登り切った通りの向こう側に目  
指すホテル「レオネック」があった。学生に  
心からお礼を言って、握手をして別れた。

こうして、なんとかホテルにチェック  
インできたのである。

案内された部屋は日本のビジネスホテル  
のように狭い部屋だった。これで、一泊1  
万4千8百円(しかも、朝食なし)は、  
「たけーな!」。

計画では、明日はツエルマットへ移動し  
て、いよいよ「スイスの山旅」が始まるの  
だが、ツエルマットへ直行するのではなく、  
途中ベルンに寄って市内を少し歩いてから、  
ツエルマットへむかうことにしていた。

時間を1時間間違えていた

翌朝7時半に、チェックアウトした。フ  
ロントで駅までの道をしっかりと確認し、そ  
れにしたがって歩いたのだが、こんどは問  
題なく駅に到着した。駅までの道は、迷う  
ような道ではなかった。

そこでわかったことだが、昨日渡った橋



中世の面影を残すベルンの建物の屋根

今朝は、駅に着いてまずやらなければな  
らないことがある。あの「ガラガラ」音が  
出る大きなスーツケースをツエルマットま

で送り出すことである。スイスには「ファ  
ストバゲージ」というサービスがある。こ  
れは事前にガイドブックで知ったのだが、  
目的地の駅まで手荷物を別送できるシステ  
ムだ。(むかし、日本にチッキという、似  
たような制度があった。ぼくの学生の頃  
にはまだあった)

これは朝9時までに荷物を預けると指定



建物の下のアーケード。このアーケードは通りの両側に長く続いている。

の駅で午後5時以後受け取れるというものだ。1個(25キロまで)20スイスフラン(と、ガイドブックにはあったが、実際には22フラン・日本円では約2千円)かかる。条件は目的地までの乗車券を持っていること。

これを利用するのだ。駅のインフォメ  
ーションを探して、その場所がどこにあるか  
聞いた。何しろチューリッヒ駅は広いから  
ね。

案内の女性は指さし、その先を右に曲が  
つて、まっすぐ行けば看板がある、そこがそ  
うだと教えてくれた。しかし「ただね、オー  
ブンするのは7時半だから、まだ少し時間

があるよ」と、彼女はたぶんこんなことを言ったのだと思う。

そこでぼくは「えっ？」と思ったのである。今朝7時半にホテルをチェックアウトしてきたのに、案内の女性は7時半までまだ時間があるから、荷物取扱所はオープンしていないという。自分の時計を確認したら、8時少し前だった。「あれっ？」と思って、駅の時計を見たら、7時少し前だった。ということは、ぼくは6時半にホテルをチェックアウトしていたのだった。

ここで初めて気づいたので！



ベルンの街角で  
大きなチェスを楽しむ大人たちを、あぐらをかいて見入る少年の姿がおもしろい。

単なる朝食をして、時間が来るのを待った。荷物取扱所へ行ったら、すでにオープン

飛行機の中で現地時間に腕時計を合わせただけだが、1時間早く合わせてしまっていたようだ。どうりで、昨日から少しだけ時間に対する違和感があったのだが、その理由がこれだったのである。

目の前にあるカフェでコーヒーとパンで簡

していた。スイツケースを示して「プリーズ ファーストバゲッジ トゥー ツェルマット」(ぼくの片言英語は、こんなもの)すると係の人は、こいつはるくに英語がしゃべれないかと判断して、余計なことを言わずに、「チケット プリーズ」という。それと運賃が「22フラン」であることも。「オーケー」とぼくは返事をして、スイスパスを示し、22フランを払う。すると、係は書類をよこし、それに名前を書き込んで渡す。その時、心配だからもう一度「トゥー ツェルマット プリーズ」と繰り返す。係は「オーケー」と言って、書類の半分を渡してくれる。これで手続きは完了である。あとは、ツェルマットで荷物を受け取るだけだ。ぼくは一仕事やりとげたようで、ちよつとだけ満足感に浸るのである。



大聖堂の尖塔  
修理工事中だった。

さて、つぎは乗る列車である。スイツケースから解放され、小型のザックだけを背負って、時刻表のところへ行つた。時刻表は駅のおちらこちらに張られている。黄色いのが出発列車専用で、白色が到着列車専用のよ

うだ。これには、チューリッヒ中央駅から出発するすべての列車が表示されている。たとえば8時台に出発する列車が、行き先と何時何分に何番線から出発し、それと停車する主要駅が表示されている。とても細かいけれど、よく見るとわかりやすい。これからツェルマットに移動する前に、首都ベルンの市内見物をするので、ベルンまでの列車を探す。すると、ジューネーブ行のIC(インターシティー・都市間を結ぶ急行)が8時2分に16番線から出ることが分かった。ベルンまで約1時間だ。驚くのはここチューリッヒ中央駅のプラットホームの数は六十を超える番線があることだ。これからしても、チューリッヒ中央駅の広さがわかるというものだ。

16番線のホームに行くと、すでに列車は停車していた。スイスの列車は自分でドアを開けて乗り込むようになっていて、ドアのわきにあるボタンを押すと、扉が開く。この列車は2階建てであった。ミーハーなぼくは、当然2階席を目指した。朝8時過ぎのジューネーブ行きはほぼ満席で、乗客の多くはビジネスマンのようだった。

列車は定刻になると、「音もなく」走り出した。日本のように構内放送で出発するか「危ないから白線の内側まで下がれ」や、車内放送で「閉まるドア」に気をつける」などの注意放送は一切ない。とにかく気づくと列車は動いていたのだ。スイス旅行中には、いろいろの列車に乗ったがすべて出発の案内はなかった。はじめのころは出発放送がないことに不安というか、物足りない

さを感じたが、慣れるにしたがつて、これが自然なのだと思うようになってきた。

もちろん出発してから行き先や停車駅の車内放送はあり、ぼくはこの車内放送で降りる駅を確認していたのだ。しかし、聞き取れないことの方が多くて（少し耳が遠いことと、ドイツ語や英語のイントネーションがちがっていたりしたため）、その場合はあらかじめ調べてきている、たとえばチューリッヒとベルンの間は約1時間であるから、1時間近くたったなら、車内放送に注意していた。聞き取れない場合には、近くの乗客や、通りかかった車掌に確認するようにした。ぼくの聞いていた範囲では、車内放送はドイツ語と英語で案内されていたが、観光用の列車の中には、そのほかにフランス語・中国・ハンガール・日本語が加わる場合もあった。

### 中世の街並みを歩く

列車は、午前9時、ベルン駅に着いた。ベルンはスイスの首都であり、旧街並みは世界遺産に登録されている。この街を5時間ほどこれから散策するのだ。5時間と決めたのは、ここからツェルマツトまで列車で2時間ちよつとかかるので、午後4時ころにはツェルマツトにつきたいと思ったからだ。

ガイドブックを見れば見どころなどいろ

いろ載っているが、短い時間なので、ここはガイドブックに頼らず気の向くままに散策しようと思う。

朝から駅前を多くの観光客が歩いている。



アーケードの通りを歩いてきたら、時計塔や牢獄塔といわれる建物があった。これは牢獄塔。トラムが盛んに行き来している。

生来のアマノジャクなので、人があまりいない方向に向かって歩いていたら、川を見下ろす場所に出た。川の向こう側は緑の多い郊外のようにだった。ぼくのいる側は大きな建物の裏側だ。後で表側に回ってみたら、ここは連邦議会議事堂など伝統的な建物がつらなる場所に出た。

川に沿って歩いていると、（といつても、歩いているのは川よりかなり高い大きな建物の裏道・市民や観光客が歩くための散歩道）大きな尖塔が見えてきたので、これを目指すことにした。これがベルンの大聖堂だった。尖塔の上部は工事中だった。今度は、表通りというか、両側がアーケード

（建物の下がアーケードになっている）の通りに出た。この繁華な街並みを多くの観光客が歩いていた。レストランもたくさんあり、そのすべての店が、イスとテーブルを外に出して準備をしていた。気の早い観光客は、そこでコーヒーやビールを飲んでいた



繁華な通りを一本はいると、底は閑静な通りだった。こんな通りにも、中世からの泉があった。

ベルンの町には噴水があちらこちらに立っている。これは中世からずっとあるもので、観光の見どころの一つになっているようだ。それぞれの噴水の上には様々な彫刻で飾られていた。噴水といつても、多分中世の時代には旅人が憩って、のどをつるおす場だったのだらう。

すみません。パソコンの故障で発行が遅れてしまいました。「スイス旅行記」はまだ続きます。